

諺にみるドイツ人の動物観

尾 関 英 正

Die deutsche Tieranschauung in Sprichwörtern

Hidemasa Ozeki

Resümee

In deutschen Sprichwörtern kommen verschiedenartige Tiere vor: Vieh, Vögel, wilde Tiere usw. Diese Tiere werden darin oft als metaphorische Ausdrücke für Menschen benutzt und ihre Eigentümlichkeiten auch genau geschildert. Deshalb werden Image und Schätzung jedes Tieres dann klar, wenn man die sogenannten Tier-Sprichwörter untersucht.

Bei den als Gegenstand der Untersuchung ausgewählten Tieren handelt es sich um die zehn Arten, die am häufigsten in Sprichwörtern vorkommen: 1) der Hund (1769 Beispiele), 2) die Kuh (1055), 3) die Katze (962), 4) das Pferd (938), 5) das Huhn (798), 6) der Esel (659), 7) der Wolf (652), 8) der Vogel (625), 9) der Fuchs (437), und 10) die Ratte/die Maus (349).

Als Ergebnis lässt sich kurz zusammengefasst folgendes sagen: Zum einen erscheint ein Tier desto häufiger in Sprichwörtern, je nützlicher und familiärer es für den Menschen ist. Zum anderen können die Tiere nach ihrer Nützlichkeit in drei Gruppen eingeteilt werden. Die erste Gruppe bilden dabei "nützliche und gehorsame Tiere", die zweite Gruppe "bedingt nützliche und unschädliche Tiere" und die dritte Gruppe "feindliche und schädliche Tiere". Hierin spiegelt sich die Struktur der menschlichen hierarchischen Gesellschaft.

Wie man daraus ersieht, geben Bild und Einschätzung jedes Tieres schließlich die rationelle Denkart des Menschen wieder, was wiederum den Hintergrund seiner Denkweise erhellt. Damit hängt eng der "Menschenzentrismus" zusammen, der nicht nur in Deutschland, sondern auch in anderen europäischen Ländern anzutreffen ist.

(1) はじめに

諺には、大きく分けてギリシャ・ローマの古典や聖書に源を持つものと、その土地の一般民衆の間で自然発生し、語り継がれてきたものがある。いずれの場合も、諺は民衆の間に浸透し、幾世代にもわたって語り継がれてきたことによって、その土地や民族に合った内容や表現に少しずつ変化してきたのである。こうした事情から、諺は単に名言や処世訓であるだけでなく、民族の精神の反映でもあり、そこには土地に根ざした考え方や生活の様子も表わされている。ヘルダー (Johann Gottfried Herder 1744-1803) は、かつてエッセイの中で「諺は民族の考え方を映しだす鏡である¹⁾」と語った。ヴァンダー (K. F. W. Wander 1803-1879) も、同じように諺は「国の精神の所産」だと述べている。

諺が広まったとされる中世から十八世紀頃までは、まだ民衆の多くは農耕や牧畜、狩猟や山仕事などをして生計を立てており、動物との係わりもごく日常的なことだった。W. H. ブリュフォードによれば、都市部の生活でも「十七世紀末近くまでベルリンの家々の前面には豚小屋が見られ、ヴァイマルのごとき小都市では十八世紀にもなお〈町の羊飼〉²⁾がいる有様だった」。この状況は十八世紀に入ったフランクフルトでも大きく変わることはなく、「市民たちは市門外に大きな菜園やブドウ園をもち、また他方には市の共有牧草地や森で牛や豚を飼う者があ³⁾った」という。ましてや農村では、野生の動物を日常目にすることは少なくなかった。

こうした普段からの動物との係わりは、当然のことながら諺にも多く見られた。例えば、1832年に書かれたゲーテの『ファウスト』第二部には、「誰が真の暗夜に悪者を見わけることができよう／雌牛は黒く、猫は灰色に見えるにき⁴⁾まったものだ」(相良守峯訳) という文章がある。「闇夜に烏」のことを言うが、ドイツでは雌牛と猫が登場する諺になっている。もともと、諺は比喩的な表現で表わされるものが多く、言葉や言い回しは自ずと

生活に即したものになってこよう。古典や聖書に由来する諺も、使う人の生活や土地柄に合わせて消長してきたと考えられる。よく知られている「後の祭り／盗人をみて縄をなう」は、ラテン語訳の諺「家が焼け落ちて消火ポンプがくる」から変化し、「雌牛が盗まれて小屋の修理をする」になったという⁵⁾。いかにも森の民であるドイツ人らしい譬えである。

ところで、こうした諺に登場する動物を用例数に従って並べてみると、その種類も人間との係わりをよく表わしている。ヴァンダーの『ドイツ語ことわざ辞典』⁶⁾によれば、一位は「犬」(1769例)、二位「牛」(1055例)、三位「猫」(962例)、四位「馬」(938例)、五位「鶏」(798例)、六位「驢馬」(659例)、七位「狼」(652例)、八位「鳥」(625例)、九位「狐」(437例)、十位「鼠」(349例)となっている。概観すると、前半には、犬、猫から家畜まで人間の暮らしに溶け込んだ動物が多く見られる。後半には、狼、狐から鳥や鼠の類まで自然に生息する動物が集中している。これらは、しかしいずれも人間の身近なところで暮す動物ばかりだと言えよう。前者は言うまでもないが、後者は敵対する動物とはいえ農民には身近な存在である。

それでは、これらの動物に対するイメージや評価はどうなのであろうか。この用例数の順位にも、すでに人間との係わりで評価される動物の見方が垣間見えるようである。旧約聖書の『創世記』(9章2-3)に記された次のような文章からも、このことは容易に推察できよう。「地のすべての獣、空のすべての鳥、地に這うすべてのもの、海のすべての魚は恐れおののいて、あなたがたの支配に服し、すべて生きて動くものはあなたがたの食物となるであろう⁷⁾」。ドイツのみならず西洋のキリスト教社会では、こうした人間中心の発想がすべての基本にあり、その上に動物の働きや習性によってそれぞれ異なった見方がなされてきたという。そこで、ここでは『グリム童話』の動物も参考にしながら、諺に出てくる各動物の特徴やイメージを見ていくことで、ドイツ人の動物に対する見方と評価を詳しく探っていくことにしたい。

(2) 益多く従順な動物：牛、馬、驢馬

ここに取り上げた牛、馬、驢馬は、用例数から見ると二位、四位、六位の順につけているが、有用性の観点からすれば、犬、猫、鶏などよりはるかに優っていることは言うまでもない。それどころか、人間にはない労働力と忍耐力をこれらの動物は持っており、この点が人々には大きな魅力であったのだろう。例えば、「骨の折れる仕事」を Ochsentour (牛のハイキング)、Pferdearbeit (馬の仕事)、Eselarbeit (驢馬の仕事) と言うくらいである。この他にも、牛、馬、驢馬は、それぞれ優れた特徴を持っており、神話にも関係してくる重要な動物である。一般的にはイメージも悪くないことは容易に想像できよう。

よく知られているように、雌牛は雄牛より評価が高く、eine melkende Kuh (乳を出す雌牛) と書いて、「金のなる木」と言われ、人間には「豊饒、価値あるもの」のシンボルと見なされてきた。ゲルマン神話では、雌牛は天地創造のとき巨人に乳を与え、さらに氷を舐めて人間をこの世に送り出したと伝えられている。そんな背景からも、Anderer Leute Kühe haben immer größere Euter. (他人の雌牛はいつだって大きな乳房を持っている) という諺があり、「隣の芝生は青い」と雌牛は嫉妬の対象ともなっている。

同様に、馬も評価が高く、古代より「敏感で、聡明なもの」と見なされ、ゲルマン神話では主神のオーデインが八本脚の駿馬に乗って天翔けていた。馬はあらゆる点で優れていて重宝がられたが、特に白馬は神の乗物として畏敬の対象にもなっていたようである。こうした馬のイメージは、当然諺にも表わされている。Das Pferd ist oft klüger als sein Reiter. (馬は騎手より賢いことがよくある)。これは、動物だからといって馬を「侮ってはいけない」というのである。

もちろん、驢馬にも崇高な側面はある。驢馬はキリストの誕生に立会い、マリアのエジプトへの逃避行にも一役買っている。馬のような速度はないにしろ、その「誠実さ」から驢馬は神や預言者の乗物と言われ、さらには予言の能力を持つ動物と見なされてきた。諺にもその名残が窺われる。

Wenn man den Esel nennt, so kommt er getrennt. (驢馬を呼べば、走り来る) と言って、足の遅い驢馬も「噂をすれば、影が差す」ほど誠実なのである。

しかし、これらの動物はいずれもおとなしく働くだけに、現実には辛い目に遭うことが多かったようである。Du sollst dem Ochsen, der da drischt, nicht das Maul verbinden. (脱穀をしている雄牛にくつわを掛けてはいけない)。使うだけ使って、褒美を与えない人がいたのだろう。「働く者が多少得をしても悪く思っていない」というのである。馬の場合も同じで、Das Pferd, das den Hafer verdient, kriegt ihn nicht immer. (麦を得るだけの仕事をした馬さえ必ずしもそれが得られない) と言うように、「骨を折っても相応の褒美が貰えない」馬もいた。同じ内容のものが驢馬にも見られる。Dem Esel, der das Korn zum Mühle trägt, wird die Spreu. (穀物を製粉所に運ぶ驢馬にモミ殻が与えられる)。随分馬鹿にした話だが、驢馬も「大骨を折ったあげく、褒美がもらえない」ことがよくあったようである。

この他にも、とくに牛と驢馬は、馬とは違って「鈍重」、「愚直」のイメージが強く、愚弄されることが多かったようである。牛と驢馬のこうしたイメージは、考えてみれば堅実さ、誠実さの裏返しでもあり、明らかにこれは動物を見下した発想だと言えよう。牛でも雄牛に限定されるが、こんな諺がある。Der Ochse stößt sich nur einmal am Scheunentor. (雄牛は一度しか納屋の戸にはぶつからない)。言うまでもなく、「同じ失敗を繰り返すのは愚か者」の意味だが、言外にはあの牛の鈍重さがイメージされている。全く同じ内容の諺が驢馬にも見られる。Der Esel geht nur einmal aufs Eis. (驢馬でさえ氷の上に行くのは一度だけ) といい、ここでもやはり驢馬の愚直さが前提になっている。

こうした諺の場合、牛では特に乳の出ない雄を対象にしている点が特徴的で、きわめて打算的な発想である。Man kann vom Ochsen nur Rindfleisch erwarten. (雄牛からは牛肉しか期待できない) などその証左であろう。驢馬に至ってはもっとひどいもので、Wer sich selber zum Esel macht, dem will jeder seine Sache auflegen. (自らを驢馬にする者には、皆が荷を背

負わせる)という。つまり、驢馬のように「控え目にし過ぎる人は、つけ込まれる」というのである。他にも、諺ではないが、Eselei (驢馬三昧) と言えば、「愚行」を意味し、驢馬も馬鹿にされどうしと言えよう。

ところが、こうしたイメージと少し違うのが、昔話をもとに書かれたグリム童話に登場する動物である。馬については、優秀さゆえにイメージや評価はあまり変わっていないが、牛と驢馬はそうではない。あの愚弄された鈍重な雄牛が、『三人姉妹』では剣で切りつける神の子ラインハルトを「角で引っ掛け、空へ放り投げ」てしまうのである。⁸⁾ デズモンド・モリス (Desmond Morris) によれば、「荷役動物は、倒れるまで働かされた」⁹⁾ という社会背景からしても、この牛の扱いは特別で、恐らくあまり手が加えられていない昔話に残る牛のイメージだったと言えよう。

全く同じように、愚直さの代名詞のような驢馬も、現実とは正反対の扱いになっている。『ちいさなロバ』では、リユートの吹ける音楽好きな驢馬が、「とても上品に、礼儀正しく」振る舞い、結果、ある国のお姫様をめとり、王様になるのである。¹⁰⁾ 驢馬は、ここでは「愚直」ではなく、王家の後継者に相応しい「気高い」存在として描かれていて、マリアのお供をしたあの誠実で崇高なイメージが蘇っている。驢馬とリユートの関係も、普通は *Er passt dazu, wie der Esel zum Lautenschlagen*. (驢馬のリユート演奏と同じくらい彼はそれに合っている) といい、似合わない典型を皮肉って表わす。しかし、ここではそれが全く逆の扱いになっていることに気づこう。

こうしてグリム童話を見ると、擬人化した話が多いとはいえ、どの動物もその特徴と共に比較的公正に評価され、描かれていると言える。1812年この童話が初めて出版されたとき、序文には次のように書かれていた。「本当に幸せそうに見える子供の純粹さと同じ純粹さが、この文学には浸透している。昔話も子供もいわば同じ、青白く、汚れのない、キラキラ輝く目をしている……黄金時代について語る神話と同じように……この文学は公正さを示している」¹¹⁾。グリム童話はその成り立ちから諺とは性格を異

にしている、同じ動物でも必ずしも似たようには扱われていない。それゆえに、双方の違いがまた人間の動物に対する係わり方やその背景をより明確に示してくれるであろう。

(3) 益少なくとも無害な動物：犬、猫、鶏

ヴァンダーによれば、犬、猫、鶏は、用例数では一位、三位、五位になっており、全般的に有用性の高い牛、馬、驢馬より上位にある。これらの動物は、農家にとっては大きな力とはならないが、その習性を利用することで多少役に立ち、人間にも馴染みやすい存在となった。一部には、特別な愛情をかけられるものもいたという。しかし、一般には利用できる習性があるとはいえ、その存在は冷遇されることはあっても、そんなに評価されることはなかった。この点はグリム童話でもそれほど大きな違いはないようである。

そこで、犬、猫、鶏がかつてどんなイメージであったかを少し見ていくことにしよう。犬を扱った古い諺に、「命あってのものだね」にあたる *Besser ein lebender Hund als ein toter Löwe*. (生ける犬は死せる獅子よりまし) という言葉がある。もともと、これは旧約聖書からでた諺だが、ここでの犬は明らかに「卑しいもの、不浄なもの」のイメージが前提になっている。こうしたイメージは古い時代に強く、旧約聖書では犬は死肉をあさる卑しい動物として記されている。¹²⁾ *Hund bleibt Hund, wenn er auch ein rotes Halsband trägt*. (赤い首輪をしていても犬は犬)、この諺もその一つで、犬がどんなに着飾っても「しょせん犬に変わりはない」というのである。

もちろん、こうしたイメージは犬だけではない。猫も同じで、一般に「下賤なもの」の代名詞のように使われていた。よく聞く話に、ドイツの皇帝マキシミリアン一世が木彫家のヒエロニムス・レシュを訪ねたとき、作業台にいた猫が皇帝を怪訝な顔して眺めたため来客が笑って言ったという。¹³⁾ *Sieht doch die Katze den Kaiser an*. (猫だって皇帝を見ているではないか)。つまり、「下賤なものでも貴人をおどおどせずに見る(権利がある)」

というのである。ただ、こうした猫も普段からあまり餌は与えられなかったため、「不潔で汚らしく、小さな害獣をむさぼり食って暮して」いたという¹⁴⁾。

鶏についても、そのイメージはほとんど変わらない。例えば、Huhn ist König auf seinem Mist. (鶏は自分の糞の上では王様だ) という諺がある。これは「内弁慶」ほどの意味だが、表現からしても鶏がいかに糞にまみれて不潔に暮らしていたか理解できよう。しかも、餌を拾って食べる鶏を形容する場合も、arm (哀れな)、dumm (愚かな)、verrückt (いかれた) などの言葉が付きもので、そのイメージは犬や猫と何ら変わらない。因みに、犬にも鶏と同じように、Der Hund ist tapfer auf seinem Mist. (犬は自分の糞の上では勇敢だ) という諺があり、鶏も犬も「卑しいもの、下賤なもの」という点では紛うことなく同類のようである。

こうしたイメージをもつ動物も、しかし時の経過とともに印象を徐々に変えていく。人間がこれらの動物とうまく付き合うようになり、訓化して、習性をうまく利用するようになったのである。特に犬については、その変化は著しい。周知の通り、犬は「人間に忠実な存在」となり、番犬や猟犬として諺に登場するようになった。番犬を扱ったものに、Wenn alte Hunde bellen, sich hinaus! (老犬が吠えるときには外に注意しろ!) という諺がある。言うまでもなく「大人空言を言わず」ほどの意味で、警戒心の強い犬の習性が利用されてる。猟犬に引っ掛けた諺には、Mit Hunden fängt man den Hasen, mit Loben die Narren, mit Gold die Frauen. (犬で兎を、褒めて阿呆を、金で女を捕まえろ) がある。兎狩りには、ハンターとしての犬の習性が欠かせないことをいい、文字通り「地獄の沙汰も金次第」というのである。

習性が利用され、人間の役に立っているという点では、猫も同じである。Die Katze lässt das Mäusen nicht. (猫は鼠捕りを止めない) は、猫のもっとも得意とするところであり、「三つ子の魂百まで」である。この猫の習性は、しかし鼠にとっては大変な脅威で、Der Katzen Spiel ist der Mäuse

Tod. (猫の遊びは鼠の死)、つまり「安易な戯れ人泣かせ」と言われている。人間からすれば、ここが狙いどころであり、Wenn die Katze nicht zu Hause ist, tanzen die Mäuse. (猫がいないと鼠が踊る)、「鬼のいぬまの洗濯」とならないよう、猫にはあまり餌を与えないようにしたという。

鶏も同様に、役に立つ習性を持っている。So lange die Henne Eier legt, so lange legt man ihr auch. (雌鶏は卵を産むかぎり、自分にも褒美がもらえる)といい、「卵を産む」ことが長所であることを、雌鶏は自覚している。まさに「芸は身をたすく」といえよう。だが、愚かなはずの鶏もなかなかしたたかで、Die Hühner legen Eier durch den Kropf. (雌鶏は餌袋によって卵を産む)という諺通り、「卵を産ませたければ、いいものを食べさせよ」というのである。その態度たるや猫とは大きな違いである。

こうした動物も、しかし多少役に立つからといって安穩としていられるわけではない。彼らは人間に飼われている以上役に立って当たり前であり、役に立たなくなれば存在自体が危うくなるからである。現実には、彼らが害を及ぼさなくても、用無しとなれば、飼うこと自体が、益ではなくなる。K・トマスによれば、これらの動物は「年をとって役立たずになると、たいていは絞め殺されるか水死させられた¹⁵⁾」という。グリム童話にも、やはり同じ目にあう『老犬ズルタン』の話がある。老いたズルタンを飼い主が始末しようと女房に次のように相談している。「ズルタンじいさんを撃ち殺そうと思うんだが。もうおれたちの役にはまるで立たないからな¹⁶⁾」。人間の犬に対する見方は非常に冷静で、心情的な部分はあまり見られない。

猫に至っては、貢献度もそれほど高くないせいか、犬以上に冷めた見方がなされているようである。猫は、鼠を捕るためにあまり餌が与えられなかったようだが、鼠捕りができなくなれば、餌どころか、始末されることになる。そんな猫だけに、Der besten Katze kommt ein Maus hinaus. (最良の猫から鼠が逃げ出す)となれば、これは「猿も木から落ちる」では済まされず、処分の対象となった。「無駄、無意味」は、ドイツ語で für Katze (猫のため) というが、現実はそんなに甘くないようである。

このことは鶏の場合も全く変わらない。Kräht die Henne und schweigt der Hahn, ist das Haus gar übel dran. (雌鶏がコケコッコと鳴き、雄鶏が黙れば、家はうまく行かない)と言われ、これは悪い前兆と見なされた。卵を産むことが雌鶏のいいところだったが、その雌鶏がコケコッコと鳴けば、雄になる。諺では、これは「かかあ天下の家はうまく行かない」ことをいうが、現実にはこの雌鶏は用無しであり、鶏の首は捻られたという¹⁷⁾。

(4) 敵対する有害な動物：狼、狐、鼠など

狼、狐、鼠と言えば、いずれも俊敏で狡猾なイメージを連想させる野生動物であり、用例数では、狼が七位、鳥が八位、狐が九位、鼠が十位と、いずれも後半に集中している。この中で、鳥は必ずしも有害とは言えないため、ここでは鳥をカラスに限定して一緒に見ていくことにする。そこで、問題になるのが有害の定義である。これはあくまで人間から見て害あって益なし、しかも訓化できないことを前提にしたものになろう。K・トマスによれば、もともと動物は「食用／非食用、訓化／野生、有用／無用」の三つのカテゴリーに分けられていたという¹⁸⁾。この分類からすると、狼、狐、カラス、鼠は、非食用、野生、そして無用に当てはまり、人間とは敵対する害あって益なしの関係になる。

狡猾で獰猛なイメージが強いのは、やはり狼であろう。特に、狼は農家の人々には恐れられてきた。ゲルマン神話では、狼は戦いと知恵の神オーディンに仕え、その足許で獰猛さをあらわに供物を食していたという。今でも、「ひどく空腹なこと」を Wolfshunger (狼の空腹) といい、「ひどい目にあう」ことを unter die Wölfe geraten (狼に捕まる) といって、その獰猛さが窺い知れる。諺では、Der Wolf ändert das Haar und bleibt, wie er war. (狼は毛が変わっても、もとの狼のまま) という言葉があり、「悪党はどう転んでも変わらない」ことを伝えている。それほど怖いイメージがあったのだろう。

狐についても、怖いイメージは変わらない。狼ほど獰猛さはないが、

「ひどく怒る」ことを fuchsteufelswild (狐が悪魔のように怒った) といい、多少の怖さはあったようである。また、この「悪魔」からも推察できるように、中世には狐は狡猾なところから悪魔や魔女の動物と見なされていた。欲張りで、ずる賢い点では、狐も狼に引けを取らず、狼と同じ内容の諺が見られる。Der Fuchs ändert wohl den Balg, behält aber den Schalk. (狐は皮を変えても、狡猾なことに変わりはない)。これは、「外観は変われど、本性は変わらない」ことをいい、狐の狡猾さへの忠告とも受け取れる。

悪のイメージは、野生動物のせい、カラスや鼠にもよく見られる。wie ein Rabe stehlen (カラスのように盗む) と表現して、「手癖が悪い」ことをいい、Rabenmutter (カラスの母親) と書いて、子供の世話をしない「薄情な母親」のことをいう。グリム童話にも、やはりこれとよく似た『からす』と題する話がある。¹⁹⁾ 母親がむずかる娘に「おまえがからすになって、どこかへ飛んでいってくれたらいいのに」と薄情な気持ちを見せる話である。鼠にも、また同様に悪いイメージがある。鼠は、それ自体すでに「嫌な奴」を意味するが、船乗りの伝説からでた Die Ratten verlassen das sinkende Schiff. (鼠は沈む船を見捨てる) という諺でも、「いい加減な奴」として扱われている。

こうした動物へのイメージは、農民にとっては単なる印象では済まされず、家畜を狙う有害な動物に対する警鐘でもあった。それに、これらの動物は人間には馴染まず、訓化できない野生動物であって、その評価は非常に低い。狼の場合、存在自体がすでに有害と見なされていた。Der Wolf frisst auch die gezähnte Schafe. (狼は数えてある羊まで食ってしまう) といい、「避けられない害悪にはどんな用心も役に立たない」と農家の人々は嘆いている。Der schreit zu langsam, den der Wolf erwürgt. (狼に殺されかけて泣き叫んでも遅すぎる) と言われるように、その行動は素早く、気づいたときはもう「手遅れ」なのである。

有害な点では、狐も狼とほとんど同じだと言えよう。狐はよく鷺鳥を襲うことから、Wenn der Fuchs predigt, hüte die Gänse. (狐が説教するときは、

鷺鳥に気をつけろ)と言われている。何気なく静かに獲物に近づいていく狐の姿は、まさに「盗人の昼寝もあてがある」という言葉通りである。また、狩猟の手口もずる賢く、Wo der Fuchs sein Lager hat, da raubt er nicht. (自分の巣穴のあるところでは、鶏を盗まない)と言われるように、狐は絶対に「近所では悪事を働かない」のである。

カラスや鼠も、同様に悪いことをする点では変わりはない。カラスは雑食とはいえ、腐肉も食べるため、Fliegende Krähe findet allzeit etwas. (飛んでいるカラスはつねに何かを見つけだす) といって、空から畑の作物や小さな動物を狙っている。まさに「火のないところ煙は立たない」のである。さらに、Eine Krähe hackt der andern die Augen nicht aus. (カラスは他のカラスの目を突つかない)、つまり「悪者同士にも仁義あり」といって、いかにも律儀そうに見えるが、裏を返せば、仲間以外のものならカラスは容赦なく食べてしまうというのである。鼠に至っては、農家の穀物を食べる上に、かじられたら腫れ物ができると言われ、忌み嫌われた。

こうした百害あって一利なしの野生動物にも、しかし一つだけたべになることが残っている。皮肉なことだが、百害が消えてしまえばまさしく一利となろう。狼には、Der Wölfe Tod ist der Schafe Heil. (狼の死は羊の幸福) という諺がある。文字通り、いつも狼の餌食になっていた羊にとっては、その死は「他人の不幸は蜜の味」となろう。森の王様と言われた狼も、猟師の手にかかってはどうにもならないのである。こんなとき、Wir treffen uns wieder, sagt der Fuchs zum Wolf, wenn nicht früher, so beim Kürschner auf der Stange. (そのうち毛皮屋の竿に掛かって再会するよ、と狐が狼に言った) という。

狐も同じことが言えるようである。Stirbt der Fuchs, so gilt der Balg. (狐が死ねば皮が値打ち)。この諺は、もともと法律から出た言葉で、借りていた動物が死んだ場合、毛皮の価値だけ持ち主に弁償するように決められていたという。²⁰⁾その後、この言葉は「火回し」の遊びで唱えられるようになり、次のような言葉がさらに続いていく。「長く生きてりゃ年を取る。

生きてりゃ生きてる、死んだら死ぬさ。皮と一緒に狐を埋めるな、それが狐の名誉だよ²¹⁾」。悪さを働いた挙句、死んで名誉となれば、狐も本望であろう。

最後にもう一つ、鼠とカラスについて見ておこう。鼠は小さいだけに敵も多く、ここに出てきた狐も鼠を餌にする。だが、一番の敵はやはりあの猫であろう。Der Katzen Spiel ist der Mäuse Tod. (猫の戯れ鼠の死) といわれたが、グリム童話の『猫と鼠のともぐらし』の話はその典型である²²⁾。カラスについては、その死を喜ぶものがあるという話はあまり聞かない。もともと、カラスは人の死や不幸を告げる動物と言われてきただけに、その死を扱った諺は全くと言っていいほど見当たらないのである。それだけに、この動物はいっそう不気味で、不吉に見えてくる。

(5) 人間対動物の構図

ここまで個々に十種類の動物を見てきたが、これらを総体として捉え直してみると、どの動物についてもその習性と評価の間には一つのはっきりした見方があることに気づく。牛、馬、驢馬は、従順なイメージを持ち、有用性に富んでいて、人間にとっては大きな力となった。また、犬、猫、鶏は、イメージの点ではあまりよくないが、訓化されることで多少とも人間の役には立ってきた。狼、狐、カラス、鼠に至っては、イメージは最もひどく、これらの野生動物は害にこそなれ何ら人間の役には立たなかったのである。それぞれの動物がどんな習性を持ち、それが人間にとってどう役立つかが、ここではイメージと評価の大きな基準となっているようである。

こうした人間中心主義的な発想は、すでに旧約聖書の中に見られたが、D・モリスはこのことを指摘して、「人間をすべての生きものの最高位に位置づけるという新たな考え方が登場し……ほかの動物は、〈分別のない獣〉へと格下げされた……頂点に神を仰ぎ、まん中に人間、動物を底辺にすえるキリスト教徒にとって、他のすべての生きものを愚かにも迫害する

状況がしつらえられた」と述べている²³⁾。この言葉からも分かるように、「分別のない獣」は、当然ながら人間や人間社会にとって都合よく扱われることになった。さらには、これらの動物は有用性の程度によって様々な階層化されることになったのである。「益多く従順な動物」、「益少なくも無害な動物」、「敵対する有害な動物」の区分もその一つと言えよう。

こうした階層化の中で、動物のイメージや評価はおおよそ決まってきたのである。牛、馬、驢馬については、いつの時代もイメージは大きく変わることはなかった。彼らはおとなしく、人間に多くの利益をもたらす動物として高く評価されてきたのである。これに対し、狼や狐の場合、イメージは古代より何も変わっていないが、性質は馬や牛などとは正反対で、狡猾で有害、しかも馴染むことのできない最悪なものであった。牛は「偉大な創造主」として、馬や驢馬は「神の乗物」として、また狼は「軍神の見張り番」として、狐は「悪魔の動物」として、神話や昔話にそのまま登場し、後世に伝えられてきた。その意味では、これらの動物のイメージや評価は、時の推移の中でそれほど大きく変化することはなかったと言える。

一方、こうした動物以外の犬、猫、鶏などはどうだったのだろうか。もちろん、これらの動物もその資質や習性からくる独自のイメージを持っていた。例えば、Hundsbiss heilt Hundshaar. (犬にかまれたら犬の毛をあてろ)とよく言われるが、古い迷信によれば、人は狂犬にかまれたとき、その犬の毛をかまれた傷につければいいというのである。この考えは、類似療法により凶運を払拭し、「邪悪を邪悪で癒す」というのである²⁴⁾。犬はかつては「不浄のもの、邪悪なもの」として恐れられたのである。しかし、訓化によって次第に犬も人間に忠実になり、人間社会に多少とも役に立ち、害のない存在になっていった。猫なども全く同じ道を辿ることになった。ここには、当然イメージや評価の変化が生ずることになるだろう。

こうした人間の合理的な発想は、しかし裏を返せば人間が大自然の力に飲み込まれることなく、自然といかに対峙していくかを示したものであり、古代の蒙昧主義を抜け出す術でもあった。この考え方は、やがては自然を

も征服していくことに繋がっていくのである。すでに見てきた『創世記』で神がノアに語る箇所からも分かるように、人間と動物は近しい関係にはなく、しかも人間は動物を好きなように扱っていいことが明らかにされたのである。中世には、農奴を正当化するためにも、人間は動物を人並みに扱うことなど考えられなかったのである。

そんな中、動物との関係はより合理的、経済的なものになっていったことは想像に難くない。動物は重要な労働力であり、食糧源であったが、その扱いはまさに奴隷のようだったという。例えば、牛、馬、驢馬は荷役動物として使われ、犬は番犬や猟犬として飼われ、猫は鼠退治の道具として馴らされてきた。ただ、どの動物も倒れるまで働かされたのである。あの優等生の馬でさえ用無しとなれば、殺されることもあった。グリム童話でも、その様子が示されている。『狐と馬』²⁵⁾では、長年主人に仕えてきた馬が年を取って用無しになり、殺される運命となる。すでに見てきた『老犬ズルタン』でもこれと全く同じ話が見られた。ズルタンは老いて番犬として役に立たず、殺されそうになったのである。

問題は、しかし役に立たなくなった動物が始末されることではなく、むしろ動物が娯楽や金儲けのために殺されたことであろう。楽しみから野生動物を容赦なく殺す傾向が見られたのである。例えば、駆除の名のもとに、穀物を餌にする鳥に対し *Friss, Vogel, oder stirb!* (鳥よ、食うか死ぬかだ!) と言って、人々は狩猟を楽しんだ。狐もその皮のために狙われることになった。すでに見てきたように、*Alle Füchse treffen sich beim Kürschner.* (すべての狐は毛皮屋で出会う) という諺が残っているほどである。狼とて同じで、狩猟を楽しむ人の恰好の標的となった。狐が狼に語る言葉が、その事情をよく表わしている。*Wir treffen uns wieder . . . wenn nicht früher, so beim Kürschner auf der Stange.* (そのうち皮屋の竿に掛かって再会するさ)²⁶⁾。

人間と動物のこうした関係は、十九世紀の終わりになってようやく見直される機運が出てきたというが、動物に対する人間の意識は果たしてどこ

まで変わっていたか疑問は残る。D・モリスはこのことを指摘して次のように述べている。「そのような無常な哲学にはすでに大規模な改革がなされているという事実はあるものの、その残影は²⁷⁾いまだにこだましている」。動物がむやみに殺されることは少なくなってきたが、人間は動物の仲間ではないという考えはいまだ健在である。言い換えれば、人間中心主義の発想はいささかも変わっていないと言っている。

西洋の文化はむしろこうした発想の上に成り立っているものであり、この発想を否定することはできない。事の是非は別にして、ドイツの様々な諺はこうした背景から生まれてきたものであることは間違いのない事実であり、そこにこそ「民族の精神」が映し出されていると言える。諺が後の世代に語り継がれていく「精神の所産」であり、知恵であるとしたら、これらの諺は今までそうであったように今後何百年もの時を経て消長していくことであろう。そのとき使われている諺が改めてその精神についても説明してくれるはずである。

テキスト Karl Simrock, Die deutschen Sprichwörter. Stuttgart 1988.

注

- 1) 池内・恒川・檜山編『ドイツ名句辞典』大修館書店、1996年、524頁。

この言葉は、エッセイ『中世における英独文芸の類似性について』(“Von Ähnlichkeit der englischen und deutschen Dichtkunst im Mittelalter”)に掲載されたもので、ヘルダーはここで民族固有の感受性を重視し、未開拓の分野であった民謡・民話などの収集の必要性を熱く説いた。

- 2) ウォルター・H・ブリュフォード著『十八世紀のドイツ——ゲーテ時代の社会的背景——』上西川原章訳、三修社、1981年、110頁。

- 3) 上掲書、110頁。

- 4) J. W. Goethe, Faust II. V. 5035—36.

Wer kennt den Schelm *in tiefer Nacht genau?* / *Schwarz sind die Kühe*, so die Katzen grau. 斜字体の部分が採用された諺にあたる。

- 5) 山川丈平編『ドイツ語ことわざ辞典』白水社、1978年、22頁。

本書によると、ラテン語からのドイツ語の直訳は、Die Spritzen kommen, wenn das Haus abgebrannt ist. (家が焼け落ちて消火ポンプがくる)であり、

その後これが Wenn das Kind in den Brunnen gefallen ist, deckt man ihn zu. (子供が井戸に落ちて蓋をする) と変わり、そして現在の形 Wenn die Kuh gestohlen ist, so bessert man den Stall. (雌牛が盗まれて小屋の修理をする) になったという。

- 6) このヴァンダー編纂の『ドイツ語ことわざ辞典』全5巻 (Karl F. W. Wander, Deutsches Sprichwörterlexikon, I–V. Darmstadt 1977) は、1863年から17年かけて編集され、各巻1800余りの頁数で、5巻からなる大著。ここには、20万を超える諺および諺ふう慣用語が収められていて、その膨大な用例数と詳細な説明は、他に類を見ないほど充実したものになっている。本稿で採用した用例数による動物の順位もこの辞典に拠った。牛は雌牛 (die Kuh 634例) と雄牛 (der Ochse 421例) を合わせた数 (1055例)、猫は雌猫 (die Katze 940例) に雄猫 (der Kater 22例) を加えた数 (962例)、鶏は雌雄関係なく使う鶏 (das Huhn 282例)、雌鶏 (die Henne 251例)、雄鶏 (der Hahn 265例) を合計した数 (798例) になっている。
- 7) 日本聖書協会編『聖書』日本聖書協会、1979年、10頁。
- 8) 吉原高志・素子訳『初版グリム童話集②』(全4巻) 白水社、1997年、203頁。
1812年ドイツで初めて出版された『グリム兄弟により収集された子供と家庭の昔話』("Kinder- und Hausmärchen gesammelt durch die Brüder Grimm") は、あまり手直しされておらず、もとの昔話に一番近い内容であることから、ここでは初版本を採用した。引用は上記童話集から採用させて頂いた。引用の表記は、以後『作品名』(童話集巻数) だけで示す。
- 9) デズモンド・モリス著『動物との契約』渡辺政隆訳、平凡社、45頁。
- 10) 『ちいさいロバ』(童話集④) 139頁。
- 11) Brüder Grimm, "Vorrede" in: Kinder- und Hausmärchen, Frankfurt am M. 1999. S. 13-14.
- 12) 例えば、旧約聖書の『列王紀上』(14章11-12) にはこんな言葉が見られる。
「町で死ぬ者を犬が食べ、野で死ぬ者を空の鳥が食べるであろう」。他にも、犬が人肉を食べる箇所は随所に見られる。
- 13) Lutz Röhrich, Lexikon der Sprichwörterlichen Redensarten, II. Herder-Verlag, 2003. S. 824.
- 14) キース・トマス著『人間と自然界』山内昶監訳、法政大学出版局、1997年、157頁。
- 15) 上掲書、147頁。

トマスによれば、犬の場合、羊などの番犬は用無しになるとよく殺されたという。本当に可愛がられ大事にされたのは、こうした有用な犬ではなく、不

要とも思われる獵犬や愛玩犬だったという。

- 16) 『老犬ズルタン』(童話集②) 37頁。

- 17) Lutz Röhrich: a. a. O., S. 699.

解説によれば、昔から口笛を吹く娘とコケッコーと鳴く雌鶏は、時期を逃さないうちに締め上げた方がいいと言われてきた。

- 18) キース・トマス、上掲書、70頁。

- 19) 『からす』(童話集③) 63頁。

- 20) Lutz Röhrich: a. a. O., S. 483.

- 21) 山川丈平、上掲書、113頁。

昔流行したという「火回し」の遊びとは、人が本文の文句を唱えながらできるだけ速くロウソクや木屑に点いた火を隣りの人に渡していく遊びで、文句を唱えている間に火が消えたら、その人が負けとなる。

- 22) 『猫と鼠のともぐらし』(童話集①) 24頁。

この話では、猫と鼠が一緒に暮し始めたが、ずる賢い猫は名付け親になったと嘘を言っては教会に出かけていき、二人で冬の蓄えにと祭壇の下に隠しておいたフェットを一人で食べてしまう。猫は三度だましたうえに、それに気づいて抗議した鼠までも最後に食べてしまったのである。

- 23) デズモンド・モリス、上掲書、42頁。

- 24) 山川丈平、上掲書、157頁。

- 25) 『狐と馬』(童話集④) 91頁。

- 26) 山川丈平、上掲書、114頁。

- 27) デズモンド・モリス、上掲書、46頁。

参考文献

Bodo Harenberg, Lexikon der Sprichwörter et Zitate. Dortmund 1997.

下宮忠雄編著『ドイツ・西欧—ことわざ・名句小辞典』同学社、1994年。

D・A・マッケンジー著『北欧のロマン・ゲルマン神話』東浦義雄・竹内恵都子編訳、大修館書店、1997年。

自由国民社編集部編『世界の話・名言・ことわざ—総解説』自由国民社、1999年。

柴田・谷川・矢川編『世界のことわざ大辞典』大修館書店、1999年。